

九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中村哲著述アーカイブ
Nakamura Tetsu Digital Archive

ダラエ・ヌールへの道：アフガン難民とともに

中村, 哲 著

VI 「国際貢献論」台頭の中で

<http://hdl.handle.net/2324/4772346>

出版情報：ダラエ・ヌールへの道：アフガン難民とともに,
pp.167-228, 1993-11. 石風社

バージョン：初版、1993-11-30

権利関係：©Tetsu Nakamura printed in japan 1993

石風社より許諾を得て本文を公開しています。

公開しているPDFの印刷、複製および許可のない二次利用はおやめください。



KYUSHU UNIVERSITY

Ⅵ

「国際貢献論」

台頭の中で

立場を超えて——ソ連軍撤退と日本政府の苦慮

「国家権力との癒着」

ソ連軍撤退条項をもちこむ「ジュネーブ和平協定」が締結されたのは、一九八八年四月十五日、一九九二年四月の爆発的難民帰郷の始まるちょうど五年前のことである。しばらく忘れ去られていた「アフガニスタン」が再び世界の耳目を引きつけた。劇的な冷戦構造崩壊の序曲である。不動の対立として戦後世界を席卷した一つの国際秩序が、大きく変わろうとしていた。

ペシャワールには全世界からジャーナリストが押しかけ、一九八八年五月にソ連軍の撤退が開始されると、欧米のNGO（民間援助団体）が続々と殺到した。復興援助ラッシュの開始である。それまで四〇に満たなかった難民援助団体はその年のうちに二〇〇団体以上となった。

日本では竹下内閣が発足した直後で、首相の訪欧の外交的手みやげに数十億ドルの「アフガニスタン難民帰還援助」が公表された。当時、国際的に日本経済はまさに日の出の勢いと目され、GNPの伸び率が欧米諸国を圧し、ODA（政府開発援助）も米国を抜いてトップに躍り出ようとしていた。その中で「世界秩序維持」に多大の出血を強いられてきた英米は、日本が専ら「自

国権益のための投資を兼ねて経済支援する」と批判し、日本の経済力に対する内外の過大評価と羨望が大勢を占めていた。「米国が世界の警察で日本が世界の恩人だというのは面白くない（ニューズウィーク紙）」というのが、一般的な米国側の感想だったと言つてよい。「せめて我々にカネぐらいは出せ」という日本に対する要求が露骨に顔を出しつつあった。

「アフガン難民帰還援助」という降つて湧いたような話に、担当省庁は戸惑いを隠さなかった。日本から遠いアフガニスタンの詳しい情勢は殆ど伝わっていなかったからだ。閣議決定をうけて、「国連の青写真に沿つて支援すれば間違ひなكارう」と考えたのは仕方のない成り行きであつた。同年五月、即戦力として日本のNGOを招集して事情を説明し、協力を求めたりもした。

「ともかく、この中で誰か手を挙げて『私がやります』と言う者があれば……（事情説明記録）」という係官の発言は、当時の苦衷を率直に表していた。だが、絶対的な情報不足の中、実力をもつたNGOは希であつた。「ペシャワール会」の存在が外務省の一部で注意を引いたのもこの頃である。欧米諸国に比べて貧弱な、民間協力を奨励する方針もあつたのだらう、同年七月、日本の主要NGOと私に對して、外務大臣表彰が行われた。

覚悟はしていたが、果たして強硬意見が当時私の派遣母体だった或る海外医療協力団体の一部から出され、「国家権力との癒着」を指弾する声が上がつた。私自身は、表彰や勲章などとはおよそ縁のない人間で、別に政府の金を当てにしていた訳でもないし、政府と組んで何らかのプロジェクトを起こす積もりもなかつた（我々の財源は専らペシャワール会を通してくる個人寄付に



ベシヤワール・イスラマバードを結ぶミニバス

頼り、NGO補助金制度なども当時はなかった）。だが、この表彰を断らなかったのは、単純に、表彰してくれた外務省内部の人の厚意を反故にする意固地な主張を避けたかったからに過ぎない。これには、いくばくかの訳があったのである。

黒塗りの公用車

話は一九八四年八月に溯る。酷暑にペシヤワールと首都のイスラマバードをビザの事だけで七回もバスで往来し、疲労したのが災いした私は急性肝炎で倒れた。単身赴任直後で、まだ現地で親しい人間関係ができてない時である。

吐気と嘔吐で現地食を体がうけつけず、体重は十日で九キロ減少した。黄疸でまっ黄色の体を白いシーツに横たえていると、しなびたたくあんがベッドに転がっているようで情けなかった。劇症肝炎という致命的な事態も考えられたので、遺書

を枕の下に入れて観念し、ラウルペンディの安宿で、天井の扇風機の熱風にあぶられながら意気消沈していた。忘れもせぬ八月十四日、パキスタン分離独立の記念日である。外は民衆のどよめきが聞こえ、街路は祝賀パレードで活気にあふれていた。一方は敗戦記念日を翌日に控える、遠い日本に思いを馳せながら、複雑な心境だった。

高い天井でけだるそうに舞う扇風機の下で横たわっているところ、安宿には似つかわしくもない黒塗りの公用車が突然訪れた。日本大使館の車で、顔見知りの武官が降りてきて「幕の内弁当」の差し入れをしてくれた。当時のY日本大使の指図で、どこから聞いたのか、私の病状を知り、公邸に招き入れてくれた。恐縮すると共に、まさに「地獄に仏」であった。その後一ヵ月も公邸で日本食を食べて安静がとれ、体を回復した。おまけに、大使館員が奔走して、困難なビザや医師会加盟の手続きまでしてくれた。あのお陰でこうして生きておられたのかもしれない。

「国家権力との癒着」、「外務官僚との迎合」などという非難の言葉を耳にしたとき、何故かその時の情景がありありと浮かんできた。彼ら「外務官僚」は何も国策に利用しようとか、手なずけて使おうとか、下心があつたのではない。素朴な共感と好意であつたのだ。事実、非難した者は肝腎のときに手を差し伸べてくれなかったではないか。背後から石を投げつけさえしたではないか。どこの世界でも真心を持つ人はいない。「外務官僚」という十把一からげの容赦ない分類で人を糾弾することにこそ、抵抗を覚えた。私は立場を超えて働く、良心の背後にあるものに忠誠をおい

ていた。

当時日本では、「靖国法案」をめぐつて、宗教界は多分に感情的になつていたらしく、過剰な反応が私にも向けられない事もなかった。だが、戦死した将兵の死を「犬死に」と公言してはばからぬ対応にも抵抗を覚えた。どんな人の生も死も、意味を持つている。むしろ、あの二〇〇万将兵の死を無駄にせぬよう、その意味をこそ問うべきであつた。教条的な論理の対決は不毛である。政治に利用される「英霊」に対して、誰よりも割り切れぬ思いを抱いていたのは、恐らく当の靖国神社側そのものではなかつたらうか。

立場を超えて

政治的な誤解を避けるために敢えて公言しなかつたが、おそらくY大使の骨折りがなければ、現地での働きは不可能だつたらう。武官としてその下にいた書記官が、わが事のように奔走して連邦政府の厚生省と直接交渉し、私の合法的滞在を実現させたのが真相であつた（当の派遣団体はその力もなかつた。美しい議論ばかりが横行し、実質的な支えは少かつたと思う）。また、一九八四年四月にパキスタンを訪問した当時の首相が激励文を送つたり、難民キャンプの状態を見た国会議員が義侠心から、協力してくれたこともあつた。更に、太平洋戦争中、ボースと協力して「インド国民軍」を編成したある旧陸軍軍人が、自分なりの好意で情報や要人の紹介をしてくれようとした。かと思えば、反政府的な立場の労組員が、多額のカンパをするということ

もあった。現地では、地元キリスト教徒はもちろん、敬虔なイスラム教の「導師」が真心を込めて助けてくれたりもした。

実に多様な宗教・政治的立場を超えて支えられる現地事業は、その一事だけでも貴いものであった。かれらがどんな思想や立場を持っていたか私は正確に知らない。少なくともそれらに同調したことはない。逆に強い調子で反論を加えた事さえある。だが、彼らの良心的心情の発露を、立場を超えて、無名のまごころと同等に、どうしても斜めから見ることができないのである。それぞれの人の生きる世界は案外狭い。人はどうしてもその枠内で、善し悪しを考え、その中で最善の好意を示そうとする。その形がいかなるものであれ、現地に干渉や害の及ばぬ限り、私は素直に感謝する。

思い上がりでなければ、私は常に「ローマ人にはローマ人のように、ギリシャ人にはギリシャ人のようになつた」。私にとつては、ただ現地事業が人間の良心で支えられ、あらゆる人々の慰めとなり、大切なものが失われなければそれでよかった。ただ良心的事業を以て語らせよ。人の思想の限界とそれに執着する事の空しさは、まさに「アフガニスタンの悲劇」を目の当たりにして得た実感でもあった。

戸惑う「人的貢献」

殺到する援助団体

日本がおそらく戦後初の新しい援助形態をさぐって困惑している時、現地でも新情勢が次々と展開していた。パキスタン政府内部に対立が生じ、一九八八年六月ジュネジュ内閣が解散した。一九八八年八月、パキスタン大統領ジアウル・ハクが、大統領機もろとも爆殺されるという劇的な暗殺事件が起こり、九年に及ぶ戒厳令と軍政に終止符が打たれようとしていた。

この暗殺事件は謎めいた噂と憶測が終始つきまとった。時限装置つきの爆発物が果物カゴの中に忍ばされ、イスラマバード付近の上空で同乗の米国大使も巻き添えに抹殺された。いくらパキスタンと言えども、厳重な警戒網をくぐってこのような事ができる可能性は少ない。直ちに米国から大掛かりな調査団が派遣されたが、結果は公表されず、さらに疑惑を人々の中に広げた。

だが確実なことは、これが「米ソ歩みより」の脈絡の中で行われた事である。パキスタンの「反共前線国家」という位置の変化を露骨に求めるものであった。事実、一九八八年十月には総選挙が実施され、軍政に終止符が打たれた。暗殺されたハク大統領にクーデターで殺されたズル

ファイカル・ブットー元大統領の娘、ベナジールがPPP（パキスタン人民党）を率いて圧勝した。これと共に、同年の四月に数千名の死者を出したイスラマバード弾薬庫の大爆発以来、全土を震撼させた大規模なテロ・騒擾事件は一時的になりを潜めた。

「難民帰還・アフガニスタン復興援助」開始の一方で、米国・ソ連の軍事援助は、米国だけで月間三〜四億ドルのペースで継続されていた。内乱が更に激烈かつ複雑となる中で、国連の復興援助が「クロスボーダー・オペレーション（越境活動）」という変則的な形で強行されるという、奇態な現象を生んだ。笑い話では収まらない。この失態は国連とそれに乗じた日本の評判を落とした事で、厳しく反省さるべきである。

お陰で、一九八八年にソ連軍撤退が決まると同時に、それまで四〇に満たなかった難民救援団体はその年のうちに二〇〇を越え、巨額のプロジェクトが横行し始めた。実効よりは予算消化が急がれ、濡れ手に粟の援助資金を当て込んで人々が蟄集し、カネによる民心荒廃に大いに「国際貢献」したのである。

さて、「難民帰還協力」の矢面に立たされたのは、当然JICA（国際協力事業団）であった。

しかし、このての組織的支援は日本にとって経験が少なく、情報を国連に依存していることもあって、その態勢が十分に整っていなかった。JICA自身が大規模な援助の割りに少ない情報・人員の絶対的不足に悩んでいた。ペシャワール現地で前面に出るプロジェクトとしては、最大のものがUNILOG（国連輸送部）の創設、中小規模のものでは難民の産婦人科診療所での超音



ペシャワールのチャイハナ（茶店）

波検査の技術指導などがあり、一方で、ユニセフ・ペシャワール事務所をはじめ、多数の人材を国連内部に送り込んだ。大方は国連の軒先を借りた協力で実を上げようとしたらしい。

ペシャワールで私たちと目立った接触があったのは、当然第一線の保健衛生プロジェクトである。一九八八年十月、ユニセフ・ペシャワール事務所に二年の予定で派遣されたのは、小児科のK医師である。角度は違うが前線にいる者の共有できる問題がある。中央の指令的立場と現場の実情との齟齬、ペシャワールの土地柄で女性としての不利な立場、身辺防護の問題、組織内部での人間関係……はた目にも悪戦苦闘だった。

ユニセフ・ペシャワール事務所では、K医師赴任以前にいたスウェーデン系の者とフランス系NGOが馴れ合いになっていた。当時、「日本はカネさえ出しておればよい」という露骨な論調の欧

米系団体が少なくなかった。理不尽な予算要求に対して彼女が断固たる態度で臨んで機構刷新を図り、軋轢を生じたとも聞いた。特にフランス系は、MSF（国境なき医師団）の過去の活動で名声を博し、少なからぬ思い上がりがあった。実際、我々無一文のJAMSのところでさえも、いきなりフランス系のNGOが来て、なれなれしく無心するということがあったので、彼女の苦境は察せられた。

暗殺

我々JAMS自身は、財源は専らペシャワール会を主とする小規模な日本の募金に拠り、あらゆる動きとは無関係に、全く独自の計画を黙々と進めていた。しかし、同じJ（日本）を戴く以上は、良い仕事をしてもらわないと、混同されてJAMSの評判を落とし、将来に差し支える。予想外の出来事でJICAに間接協力するハメになったのは、ユニセフの「難民キャンプ母子栄養調査」である。

我々とは初め関係なかったが、プロジェクトの着眼点は良く、具体的なプランと難民小児病院の協力相手まで決まっていた。ところが、いざスタートという矢先、突然相手のリーダーの医師が自宅の玄関先で射殺された。ペシャワールでは決して珍しいことではないが、さすがの豪気なK医師も仰天した。「至急、日本側に連絡する」ところであった。私はそれまで派遣団体とのやりとりで、ささいなことが大議論を巻き起こして肝腎なことが伝わらぬと云う、現地―日本との

すれ違いを嫌というほど知っていたので、「あわてて連絡せず、同じ結果が得られるなら代替策を断行する方が賢明」と思った。そこで、「先生、難民キャンプの実情はある程度知っていますから、出来ることがあったら言って下さい」と、協力を約束したと記憶している。代ってJAMSがこの仕事を委託される結果となった。我々には良い刺激となり、検査室の力をつけるのに一役買った。

暗殺の背景について探りを入れてみると、殺された当アフガン人医師は、リベラル派の政治組織アフガン・メラトの重要人物で、イスラム急進党の政治的恨みを買っていた。初めから暗殺の標的にされていたと思われる。一説では、同医師が「イスラムと何の関係がある」と、髭（これはアフガン伝統の男性スタイルである）を公衆の面前で剃り落とし、挑発的な態度を取ったことが命取りになったとも云われる。

危険な関係はこればかりではない。「産婦人科病院への協力」の方では、日本人専門医が一人一ヵ月前後、四名が交代で来た。しかし短期では適応が困難で、うち一名は到着二日目に発狂、首都イスラマバードのJICA事務所と連絡を取りながら、急いで帰国させた事もあった。これは、JICAの手落ちではなく、厚生省側との連絡で人選に柔軟性を欠き、結果的に現地で問題を起こしたと言える。大組織の運命的欠点である。また、このグループは「パシュトゥニスタン（パシュトゥン人の国）」運動の勢力とつながりがあると目され、我々は距離を置いていた。息長い活動を考える以上、政治テロの横行する中で複雑な政争に巻き込まれるのを極度に警戒してい

た。

「伝わらざるアフガニスタン」

尤も、このような水面下の複雑怪奇な動きを読み切るのは、日本側では至難の業である。怪しげな情報に躍らされず、小規模な偵察程度で様子を見る積もりだったのかもしれない。また、「難民問題は急性の問題で短期に終わる」という認識があったのは国連と共通していた。いずれも、「アフガニスタン」の国際的関心が遠ざかると同時に、国連・欧米NGOと共に姿を消した。

UNILOG（国連輸送部）の場合は、巨額をつぎ込んだだけに波紋は小さくなかった。これは、国連の青写真に沿うものである。数十万人単位で帰郷難民を出身地別に分け、各地に「モニタリング施設」を置き、一年分の食糧・種粃を与え、ワクチンなどを施行して帰すという非現実的な計画であって、その輸送担当に一役買おうと云う訳である。結局、何も知らぬ日本政府側が踊らされた形になった。

二〇〇台の大型トラックが用意され、車両修理のワークショップ準備、その為の現地スタッフ養成、トラック基地の建設まで行うという本格的規模であった。だが、早期帰還の望み薄となつた一九九〇年には規模縮小を始め、派遣された日本人技術者四名のうち三名はアフリカに転出し、一名がしんがりに留まった（後に一九九二年六月、不幸にもペシャワールの路上で射殺された。数百メートル近くのアフガニスタンで私は偶々その銃声を聞いた）。

残された車両のうち、大部分はパキスタン陸軍の管理下に置かれることになり、日本大使館が抗議したが結局うやむやになった。更に、一九九一年一月の湾岸戦争に転用されたという噂が広まって現地イスラム民衆は憤った。これは事実ではなかったが、噂の意味するところは、国連がいかに人々の不信を買っていたかを示すものである。

以上のように、日本の「貢献」は後味の悪い思いを残して撤退し、一九九一年、日本政府は国連に約束した供与残額を凍結した。国連の中には憤激の聲が上がったが、むしろ賢明な英断だったと思う。私ごととき一民間人には知る術もないが、おそらく第一線で現地の実情に触れた人々こそ、机上のプランの非力さを切実に知っていたのではなからうか。国連の日本人職員を倒した銃弾は、「貢献」の結末の不気味な象徴として、日本への一つのメッセージと言えるものであった。

日本の援助はどう見ても及第点をつけられないが、それでもまだマシな方であった。少なくとも政治的野心はなく、面子をこり押しすることもなかった。ただ、この「アフガニスタン」を機として、人材を国連内部に送り、「国連を通しての国際貢献」が明瞭に打ち出され、以後、湾岸戦争への参加―カンボジア派兵（PKO）へと急展開してゆく。戦後国論を二分してきた平和憲法論議に新たな転機の基盤をもたらしただのも、まさに「アフガニスタン」であった。そして、それは「伝わらざるアフガニスタン」であった。

国際交流と太平洋戦争

われわれの総括

日本に帰ってから、常に私を悩ませたものは、現地の実情をいくら語っても、それが得体の知れぬフィルターを通して伝えられ、理解を得るのが困難なことであった。この悩みは恐らく私だけではないだろう。似た体験をした多くの者は、「結局、日本では解ってもらえない」という諦めで口を閉ざすか、逆に、的外れな称賛に酔い、的外れな批判で怒るだろう。私は内心、石のごとく沈黙していたかった。現地事情のことだけではなく、赴いた日本人たちの反応についても、語るほどに寂寥を感じた。悩みを解消する最も簡単な方法は、冒険と興奮に満ちた美しい思い出として、今の自分とは無関係な出来事として、自らの中から切り離してしまうことだった。

しかし、現地事業が拡大し、せめてそれを日本側から真剣に支えている人々に対しては、万分の一でも真実を伝えたかった。いや、一人の証人として伝えねばならなかった。私が努めて現地報告に心掛けてきたのはこのためである。同時に、バタ臭い文化人の論議や、軽々しい日本の国際化ブームは肌に合わず、またぞろ私の中で、せめて鬱憤ぐらい晴らしたいという気持ちだが、む

くむくと頭をもたげてくるからでもあった。だが奇妙なことは、スマートに西欧化されて、「広い視野を持つ」とされる世代や知識層よりも、泥くさい日本的な感覚を持つ層に理解者が多かったことである。戦後、日本が海外との活発な経済交流や、気軽にできるようになった海外旅行で「国際的」になったかと言えば、私は否定的にならざるを得ない。むしろ退化しているのではないかとさえ思われたのである。

今時官民あげて「国際々々」というが、近年の日本で、国を挙げて大規模な「国際交流」といえば、やはり太平洋戦争をあげねばならない。私が帰国してから、現実感を以て共感することが出来たものの一つが、従軍兵士や旧軍人たちの戦争記録だったのは意外だった。これは、勿論、現地で自分が生々しい戦争の現実に触れ続けてきたこともあるが、それだけではない。大した情報もないまま異国に送り出され、文字通り生死を賭ける日々の中で、将兵がいかに悩み、異文化の中で悲喜劇をいかに演じたかが、むきだしに示されているからである。一億あげての、この貴重な体験を我々は本当に総括したのだろうか、というのが私の柄にもない率直な疑問だった。

なるほど、学校では「平和教育」が行われ、毎年八月十五日ともなれば厳かに敗戦の記憶がマスメディアで流される。長崎の原爆記念館は今でも欠かせぬ修学旅行コースになっているし、政府も東南アジア各国に謝罪するのに吝かではない。だが、「戦争は悪い、悲惨だ、仲良くしよう」という抽象的な観念以外に何が残ったかと問うのは、言い過ぎだろうか。もしかしたら、平



ペシャワール旧市街の靴屋さん。日本への親近感は強い

和主義者の戦争断罪も、心情的な肯定的意見も、その大切な教訓を隠蔽する等質のものではなからうか、という疑問が晴らせなかった。

屈折した戦争観

戦後、多くの若者達が「忌まわしい侵略戦争」について「平和教育」され、戦争に関する一切の現実には抽象的な批判で不消化のまま受け継がれてきたように見える。前線の将兵総てが東京の大本営の命ずるままに、いたずらに殺戮を事として戦ったかといえば、絶対にそうではない。太平洋戦争において、帝国軍隊と多くの日本国民は、「アジアの同胞解放」の理想に燃えて沸き上がった。当時それは、好むと好まざると、「自明の国民的課題」として、国家の鉄棒として存在していたはずである。たといそれが独りよがりであったとしても、少なくともそ

の心情において、現在よりは遙かに高い「国際的関心」があったといえる。既に証言者も次第に去りつつあるが、中国戦線のある種の後ろめたい感情が、「帝国米英に宣戦す」の報によつて一挙に明るさを取り戻した事実を、当時の大方の知識層が回想している。

現に、パキスタンやアフガニスタンでは、太平洋戦争がむしろ肯定的に評価される場合が多い。これは、イスラム住民の英米に対する敵対感情からくるものと受け取るのが正当である。しかし、彼らの日本賛美がたとい片思いであらうと、何か私をくすぐるものがあるのも悲しい事実である。この屈折した戦争観の清算を、私は日本で教えられた記憶がない。

初期のころ私の派遣母体はキリスト教系の海外医療協力団体で、「日本が東南アジアで行った残虐行為の贖罪」を活動の動機とすると云い、日本政府と一線を画していた。しかし、道義的な意味から言えば、日本政府の海外援助もまた、戦争賠償から始まったのは事実であり、私の疑問の答えにはならない。それどころか、最も初歩的な点で私を躓かせたのも当の派遣団体である。

それは、この派遣団体が「この活動を通して（途上国の人々とのふれあい）ワーカーが変えられ、我々が変えられ、ひいては日本が変えられる事を願う」と言いながら、現地事情について驚くべき無関心で臨んだことだ。もちろん、ひとつの組織体の中には様々な意見があり、現地を理解しようとする姿勢をもつ謙虚な人々も大勢いるにはいた。だが、総じて日本側の関心は、ワーカーの動向や、その活動を国内向けにいかにアピールするかに向けられ、その組織自体の哲学に異常な力点が置かれたことは、必ずしも私だけの感想ではないと思う。私は決してこの団体

を特別目の仇きに行っているのではない。六年間も世話になったのに引き合いに出して申し訳ないが、最も身近に接したために、日本的な体質の組織の小さな一例として引用させていただくことをお許しいただきたい。別に他意はない。

こう言えば反論が容易に想像される。「驚くべき無関心」とはどういうことか、我々はパキスタンの人々の文化や生活を尊重し、その苦悩と共に歩む姿勢を哲学として崩さなかった、と。私自身は、「主義や理念など」という代物は、人間の手になる仮そめの物だという自省を保持せねば腐敗する」と信じているが、それはさておき、言いたいのは、それほど重要な理念ならば、国内での議論や宣伝に熱中せず、どうして現地事業に断固として反映させることに腐心しなかったかということである。「東南アジアでの罪責」を以て最も対日感情の良好な地域で活動するというのも、何かちぐはぐである。また、敬虔なキリスト者の多い当団体が、ワーカーや受け入れ団体をキリスト教に限定し、「キリスト者の証し」を強調するのは当然としても、広く非キリスト教徒からも募金を募るのは奇妙である（実際、何かの「キリスト教用語」を私が頻用しないので、その筋からは覚えがめでたくなかった。現地イスラム社会の中で、私は異教の中に共通なもの、人として共に立ち得る地点を求め、敢えてキリスト教徒仲間だけに通用する隠語で「神」を語ろうとしなかった。それは、いかなる言葉も立場も超えて、人として共有すべき普遍性であっても、他を排除して審く思弁の道具ではありえないからだ）。

日本側の「哲学」

話を本筋に戻そう。私が「非常に日本的な体質」というのは、自分にかくかくの理念と方針があり、それに合致すれば優等生として遇し、合わぬものは冷遇するというのでは、「我々が変えられる」という謳い文句自身が空文化することである。つまり、いかに非現実的でも、日本側で説得力のある論理のみが力をもち、現地事情はその色眼鏡で解釈される。現地情報は従となり、東京側の的外れな決定が時差ボケのように重々しく伝えられる。戦場にも似たベシヤワールの流動的情勢に、とうてい対処できるものではない。

いったい日本側の哲学が重要なのか、現地の人々の地についた理解と医療福祉への協力が重要なのか、と怪しまざるを得ない。そこには「キリスト者の証し」という、しばしば架空の気魄がワーカーを鼓舞し、失敗にしろ成功にしろ、絢爛たる修辭をまとって日本側の援助の論理を満足させる。それがたとい謙遜の衣を装ったにせよ、「神の栄光を」という一語によつて全ての問題が解消する。こうして、一つの小さな排他的な空間での審議が力をもち、東京の「基本方針」に合わぬ現場の声は、ワーカーの心理状態まで持ち出され、日本側からの視点で一面だけが誇張された「現地情報」が伝えられる。

太平洋戦争の時もそうであった。インド国民軍やジャワ島民のような例外を除けば、日本側で考えられた「解放さるべきアジア」は至るところで住民の抵抗に遭い、将兵を当惑させた。その時、東京の大本営は被占領地の住民を「土民」と称し、その文化や社会構造の理解に努力しな

かった。異国の風土が旅行者の目でとらえられても、そこに、本当にその地域を、解放された「王道楽土」や「共栄圏」とすべき何らの方策もなかったのである。時折まっとうな建言があったにしても、ただ「今はゆとりがない」という一事で否定され、誰もが何かに急ぎ、自滅への道を驕進したというのが真相であろう。

果ては、反抗する住民に対して、「こいつはアジア人じゃない」との罵倒が飛び出すなど、自己の頭の中で定めた「アジア」という架空の観念を頑なに固持して現実に目を向けなかったのである。前線での現実的判断は、図上の作戦には取り入れられず、東京の大本営の密室で立てられた都合のよい机上のプランが遂行され、非現実を現実に転化しようとする悲壮な叱咤激励のみが幅をきかせた。

無責任体制

私がまるで見てきたように、この太平洋戦争の一面を強調するのは、自分と当派遣団体との関係が、奇妙に以上の現実と符合するからである。「草の根の人々と共に」、「物や金は送らない」、「異文化の受容」などと美しい字面をならべながら、それがどれだけ現実的な事業として完遂されたかである。ここに「土民」と「草の根」との間に大きな隔たりはない。当派遣団体には、実は現地事業というものはなく、殆どは欧米ミッション団体の組織した事業に寄生して人員を送ることに終始していた。自分で動かすプロジェクトがないから、人材斡旋業にとどまり、それだけ

無責任になりえた（この点では帝国軍隊の方が戦争という大事業を抱えるだけ真剣だったろう）。例外はあるが、ワーカーの大半は欧米人チームの中で、その共有する価値観の中で、アジアを見てきたとも言える。

私の場合は、大した装備も弾丸も与えられずに、崩れかけた前線で「土民」の中に單身送り出された兵士の立場に近かった。ペシャワールでは、当派遣団体が拠り所としてきた西欧ミッシェン団体もなく、途方に暮れた現地団体の再建に向かったというのが実体である。それはそれで良い。当派遣団体にとってはまさに新情勢であったのだから、現地に応じた柔軟な対応をすればよかった。しかし、全てが中途半端だった。絶対的な物量不足に足踏みしても、「例外を認める事はできない」とし、ごく初期に徹々たる設備投資を認めたにとどまった（それさえも後に非難を浴びた）。いや、派遣決定をしておきながら、ピザさえ自分で取る準備も能力もなく、総ては私という「ワーカーの力量」で行われた。できなければ、できないと率直に言えばよい。だが、あたかもそこに重々しい権威が存在するかのごとく、契約書や報告書が行き交い、空疎な理念が掲げられる。現地の実情は各国・各地域で異なるのが当然であるが、常に帰ってくる反応は、「ネパールでは、……」、「バン格拉デシュでは、……」というもので、こちらがいかに現地情勢の報告に力を尽くしても、大きな変化は期待できなかった。

後に十分な情報と経験を蓄積したペシャワール会が、実弾を投ずるために本格的な動きを始めた時も、一部は我々を「関東軍」などと称して「独走」を戒め、自分の下部組織として我知らぬ

官僚的体質に気づかなかった。ある会議では「非難決議」まで出される始末だった（しかし、独自の方法に拠らねば現地の仕事は進まない。私としては、既に「現地での実質的長期サービスという点から見て当派遣団体は非力である」との認識を持つており、契約終了後は直ちに脱退する積もりでいた。いずれ独立して現地事業に集中すべきである。不毛な小田原評定よりも一発でも多く実弾をぶち込むのに腐心すべきだと思っていた）。

帰国後、憤懣やる方なく、名指しで釈明を求めても、一部の例外を除いて責任ある対応をしたものは居なかった。理事会のせいになったり、旧執行部のせいになったり、既に故人となった者のせいにされた。昨日まで「聖戦完遂」を叫んでいた大衆が、敗戦と同時に戦争を軍閥ひとりになすり付け、まるで自分が被害者だったかのように、あっさりと器用に水に流してしまったのに似ていた。或いは、命令を下した将校が、互いに庇い合い、漠然と「あの時の情勢では」と責任を回避したのに似ていた。

「ナウい」PKO

これは何も当派遣団体に限ったことではない。情勢が伝わらぬのはマスコミでも同じであった。カンボジアのPKO論議に際して、私が明瞭な疑義を表明した時、ある大新聞がインタビュウの形で「かつて太平洋戦争こそ最大の『国際貢献』として国民を沸かせ、今また類似の議論に沸き返っている。これは時代錯誤だ」と述べたように掲載した。つまり、兵員派遣＝軍国主義復活と

いう定式の中で私の意見が読み取られたのである。記者としては忠実に再現しようと努力しても、ついそうになってしまうのである。真意はそうではなかった。PKOが「時代錯誤」の古い軍国主義ではなく、欧米主導の国際秩序の時流に沿う「ナウい」ものであったからこそ、私は面白くなかったのである。

敗戦こそは日本に下された神罰であつた。日本は、欧米列強に伍して武力で弱小民族に君臨し、その立場に立てなかった事の破綻の意味を問い、真の平和勢力たるべく、廃墟から丸腰で再出発させられたのである。米国の勝利は武力と生産力の大きさによるものであつて、戦争は戦争である。勝った者が多少強大でスマートだったというだけの事に過ぎない。日本の「八紘一宇」と米国の「自由主義」に大差がなかったことは、まさに戦後の歴史が実証しているではないか。そして今、日本は欧米の走狗として実力行使する。これではどこに敗戦の総括があつたというのか。太平洋戦争で死んだ二〇〇万将兵の霊を靖国神社に押し込めて済む問題ではない。また、ボランティアや奉仕を日本風に言い換えて「滅私奉公」としても、これが美德であることは否定しない。「自分だけが良い目をして他人に氣遣わない」ことは反省されてよい。しかし問題は、何に向かつての「奉公」かと云うことである。

それでも当派遣団体は、日本の中ではまだまだ良心的と言わざるを得ない。そして十年を経て、その姿も多少は変わりつつある。しかし、日本の多くのNGO（民間援助団体）が、架空の「国

際」という観念に躍らされ、国内の催しもののみが徒に派手になり、中身の寥々たる現地活動をネタに、日本国民を納得させ、感動させる。一旦この虚構が確立すれば、たとえ内心おかしな事に気づいても、それは自己運動を続ける。「裸の王様」の話では、「王様はそれでも今更行列をやるわけにいかず、しずしずと歩いて行きました」と結ばれている。

我々ペシャワール会も、同じ日本の団体として、この傾向が絶無だとは言わない。しかし、我々が敢えて「時流に抗して」という時、日本側からひねりだした「国際」でなく、常に現地からの視点に引きもどす努力をしてきたといえよう。

天下一家？——早大探險部学生誘拐事件

日本人の同族意識

ペシャワールから見ていて、どうしても不可解なものが日本人の同族意識である。こう言えば、大方の人は「人によって違うのではないか」と首をひねるだろう。だが、少なくとも当地で見る限り、日本列島の住民は一種独特の一体感があるのは事実である。

一九九一年湾岸戦争で中東世界が荒れ、我々JAMSが必死でアフガニスタン国内診療所への下工作を行っている頃、早稲田大学の学生の誘拐事件がパキスタンの新聞を賑わした。以前、難民の取材でペシャワールに来た日本の新聞記者たちが続々とやってきた。こちらは驚くと共に、「関心の薄れたアフガニスタン難民の追跡調査をするとは、日本のマスコミも捨てたものではない」と感心していたが、そうではなくてガッカリした。

M新聞の或る記者が、懐かしそうに一九八八年以来の再会を喜んで言った。

「いやはや、先生にはお恥ずかしい。さぞやお怒りの事だろうとは思いますが、私もこんな取

材はバカバカしくて。そこそこにして、こちら（アフガニスタン難民）の方が気になってペシャワールまで足を延ばしました。ところで情勢も随分変わったでしょう。あの時のゲリラ司令官たちはどうしてますか。」

「三年前紹介したゲリラ司令官は党派闘争にのまれて、今接触できません。我々は距離を置いています。ゲリラも随分変わりました。米国とソ連の武器供与停止がないと、難民は党派の抗争のために動きがつかないでいます。でも、国連・欧米・NGOは事実上店じまいですから、近々大きな動きが自発的に起きてきますよ。しかしまた、何でも日本人記者が訪ねてくるんだらう。」

「それが先生、日本じゃ今、くる日もくる日も『早稲田の学生誘拐事件』で大騒ぎ。マスコミというの因果な商売で、皆があれだけ騒げば報道しない訳にはいかんです。バカな事だとは思いつつ……笑ってやってください。しかし、一人だけ直前にとりやめて帰国した学生がいます、それが普通ですな。『勇気がある』と褒められ、強行して誘拐された方は、無謀なお遊びで、ひんしゆくを買ってますよ。」

この学生たちは、「インダス河をカヌーで下る計画」を立て、イスラマバードの池で即席の練習を行い、北西辺境州のアトックから川下りを始め、カラチも近くなったシンド州の或る場所です、突然拉致されたという。それで分かった。最近先輩から来た手紙の中で、「もうそんな危険な所で無理なことをせず、駄目だと思ったら『撤退する勇気』も必要だ」という的外れな忠告が記さ

れていたのです、何のことやら訝しがっていたのである。

過保護社会

この学生たちが捕らえられた場所は、パキスタン全国に知れ渡る盗賊の巢窟である。事前に綿密な調査もなく、即席のトレーニングで事を図るとは、お粗末の一語につきる。これは、私が云う「自動販売機文化」の一現象で、金を用意して電話一本かけさえすれば、カタログ通りの望みのものが手に入るといふ、気軽な風俗である。それにしても無関心すぎる。多少は地元の心情を汲み、どこが危険かぐらゐは熟知して、遊びは地味にやるものである。当時、パキスタンでは湾岸戦争に加えて、インドでのイスラム教徒迫害事件でみな殺氣立っており、ペシヤワールのキリスト教会さえ巻き添えに投石され、「攘夷論」も横行していた。

それはさておき、軽々しいのは何も日本人だけではなく、欧米人にもいる。私の住まいの近くのカイバル峠でも、無謀な旅行者がガイドブックを頼りに「手軽な冒険」を楽しもうとして誘拐され、殺傷されたに及ぶことは希ではない。奇異に思ったのは、これら日本人の反応である。これがもし英国人であれば、大使館はせいぜい死亡確認か多少の便宜を与えるのみで、「本人がしかした事だから本人の責任」で事もなくおしまいである。まして、国を挙げて騒ぐことはあり得ない。

当時パキスタン政府自身がこの盗賊団に手を焼いており、一挙に軍隊を繰り出して殲滅すると

いう強硬意見もあったらしい。ところが悪いことに、捕まえられたのが最大のODA（政府開発援助）供与国の日本国民、おまけに大使館の注文で、非公式ではあるが事実上の準外交問題になつてしまったから始末が悪い。大使館とて「邦人保護」は義務であるから、マスコミに叩かれまいと一所懸命「救援」に努力する。マスコミはマスコミで「国民の関心事」を記事にせぬ訳にはいかぬから、われもわれもと押しかける。大使館員も新聞記者も、大方良識のある者はバカバカしいと内心は思っているのだが、ここに漫画的な過保護社会の実態が世界にさらされる。私は戦後生まれだが、かつて「国辱」とはこんなことを言つたのだろうか。地元の人々に対して赤面の至りであつた。ご親族には気の毒だが、この際盗賊退治の人柱になつてもらつて、おとなしく軍隊の砲火にさらされるのが筋というものである。こんなことはパキスタンでは常識のはずだ。おまけに、「日本人の誘拐が金になる」という観念が現地で根を下ろしては、我々も迷惑である。

結局、学生たちは「身代金なしで釈放」に至り、パキスタン政府の面目を潰し、日本の恥をふりまいて、意気揚々と帰国した（たまたま私は一時帰国の折、彼らと同じ飛行機に乗りあわせた。空港での賑々しい記者会見を横目に、軽蔑の思いでいっぱいになったものである）。

かくて、「人命は地球よりも重い」とは日本人の命のことで、その後犠牲になるであろう数知れぬ現地の人命は「羽毛のごとく軽い」という、哀しい現実に遭遇する。一億挙げて貴族化した無邪気な迷惑国「JAPAN」では、発展途上国の民衆は常に舞台の背景で、日本人が主役であ

るという希代な無遠慮がまかり通る。

これは「早稲田の学生」だけではなく、国際協力と称するNGOでも、地方自治体に流行る「国際イベント」でも、そうなのである。現地の立場にたつてどう見えるかという視点がない。

自分たちだけが盛り上がり、スポットは日本人にだけ当てられる。だが、事が事、このままでは収まらぬ。かくて国際化、国際化と徒なファッションの横行する中、本当の国際的信頼と友好を得ることは、はるかに遠いみちのりとなる。

事実と真実——ジャーナリズムの気骨

図式的理解

日本で最大級の某新聞の記者が取材にやって来た。カブールに三週間いて、今度はペシャワール側から情勢を取材するという。一九八九年五月当時、カブールからの避難民でペシャワールはあふれつつあり、我々は多くの人々の実情をこの目で見、人を送って定期的な情報を集めているので、物価から飢餓状態までかなり正確に知っていた。

確かに、同年二月にソ連軍はジュネーブ和平協定どおり撤退を完了し、これと前後して開始された反政府勢力の攻勢は大都市に関する限り、政府軍火力の前に各地で頓挫していた。政治的安定の見通しのなさから、「復興援助プロジェクト」に集まった欧米各国のNGOに動揺の兆しが見え始めてはいた。

「カブールはいかがでしたか。」

「静かなものですよ。ペシャワール側の情報は偏って信憑性がありません。カブールから人々が逃げ出しているというが、戻って来る者を勘定すると減ってはいないんですよ。国連の援助も



カブールの避難民バラックに出来たバザール

一方的なものだ。あと一年たってもカブールは陥落しやしません。」

「一方的とはどういう意味ですか？」

「だってそうじゃありませんか。『アフガニスタンの現政権を認めない』という前提で事が進んでいるのです。米国は反動勢力に一方的に肩入れしているのです。」

たしかに、その当時発行されていた時事問題解説集の多くで「アフガニスタン」を見ると、「ソ連Ⅱ進歩的政権支持、米国Ⅱ反動勢力支持」という機械的な左翼対右翼の図式で「わかりやすく」説明しているものが大半だったと言ってよい。その記者の頭の中の筋書きはだいたい読めた。だが、実情はそう単純なものではない。局面によっては、源平合戦や関ヶ原の戦を米ソ対決の筋書きに当てはめるようなものだ。

黙って聞いていると、ペラペラと「現状分析」

を披瀝して帰って行った。自分はカブール政権のナジブラ大統領に会ってきたのだ、とジャーナリストとして手柄を立てたように得々としていた。それが彼の自信の源のようで、私はこの記者の程度と、由緒ある〇〇新聞の権威とを疑い始めた。

彼の目の前には、カブールから最近逃げてきたスタッフもいたが、彼は尋ねようとしなかった。カブールは迫りくる飢餓に市民は脅え、小麦粉、砂糖、肉などの基本物価は十倍から二十倍に高騰、まともな価格で配給のあるのは政府関係者だけだった。他方で地方の戦闘は激烈となり、国外に逃れられぬ農民はカブールで「国内難民」になっていた。この記者の目撃した「続々と戻ってくる者」とは、実はこの避難民だったのである。カブールでは医薬品も底をつき、混乱に乗じた買い占めの影響で、ペシヤワールに居る我々でさえも、基本的な診療に欠かせぬ点滴や抗生物質がまともに手に入らずに困っている状態であった。

カブールからの情報では、街頭で捨て子も見られ、ジャララバードやその周辺の戦闘では罪もない女子供が死体の山を築いていた。JAMSスタッフの一部が郷土防衛でしばしば激しい戦闘に従事していた頃である。

無責任なものである。ジャーナリズムの使命は真実の報道にある。僅かな取材をネタによくもこれだけの自信たっぷりの「実情分析」がひきだせるものだと私は驚いた。事実と真実とは異なる。盲いであるという自覚があるならまだ良い。当の新聞記者は、「アフガニスタン」という巨象の尾を撫でて、それが全体像だと信じ込んでいるに過ぎなかった。

僅かの実地検分と後は借り物の情報から、「真実」を勝手に組み立て、自分の意見をもっともらしく見せる飾りに「事実」を使うとは、浅薄な小手先の手段であるが、怖いのは、当の記者もそう信じて真実を色眼鏡で見えてしまっていることである。

「君達はこのムジャヘディンの党派に属しているのか」とJAMSスタッフに変な質問をした上に、カプールの現況解説をして、アフガン人スタッフの失笑をかった。さらに、犠牲になった人々の事も忘れてこの戦争をまるでゲームのように軽々しく論じ、怒鳴りあげたい衝動に駆られたが、馬鹿々々しくなって早々におひきとり願った。

発展途上国の実情が日本の国民に生々しく正確に伝えられぬのは、これら思慮を欠く、うすっぺらな情報にも責任がある。このような態度——まるでコンピューターで合成されたような虚像を真実と取り替えてしまうことは、多かれすくなかれ、日本の社会に普通に見られるものではないだろうか。真実に対する好奇心と謙虚さ、そして何よりもそれを伝えようとする責任の重さがどれだけ感ぜられていよう。

気骨ある現地ジャーナリズム

折から好対照をなしていたのは地元パキスタンの大新聞の態度である。イスラム主義の高まりの中で、「ミッションスクール廃止論」が台頭し、まともに論ぜられていた頃でもあった。伝統社会の崩壊の危機感を背景に、日本の戦前のような極端な国粋主義が横行していた。しかし、本

来の伝統的イスラム社会は思ったより排他的ではなく、邪魔されぬ限りは異質な集団との共存を肯定するものである。○○主義という、いくぶん人工的な理想論を掲げる者は都市中流階級に多く、大部分の民衆の間では自然な生活の営みはまだ崩れていない。

パキスタンの大新聞は、国家的強圧とテロの恐怖の中で積極的な論陣を張り、ミッションスクールの存在の正当性を主張した。最大の英字紙であった「ムスリム」は次のように述べた。

「(人間の)多様性は神の創造である。自分を省みない純粹培養はひとりよがりになる。そのためこそ、他の宗教の存在を許すことは神意にかなうものであり、ミッションスクールのキリスト教精神は自ずからイスラムの精神を問い、我々のあり方を問う鏡となってきた。社会事業でも共に働くことはできる。ミッションスクールは狭い人間の考えを排し、我々の奉ずるイスラムの純化に役立つだろう。」

この論調は、イスラム大衆の健全な良識を代表するものだと言えた。結局ミッションスクール廃止は実現化しなかったが、論陣を張った少なからぬ記者たちが、その後凶弾に倒された。軍部を告発して逮捕された者もある。真実の報道に命さえ張るパキスタン大新聞のジャーナリズムは、我が国のそれに比べれば、はるかに気骨があり、犠牲者を毎年出し続けながらも堂々たるものであった。

ペシャワール会との縁

多彩な会員

ペシャワール・アフガニスタンを中心に展開する医療活動は、無数の良心的協力なしには語れない。よく誤解されるように、決して私一人が「活躍」している訳ではない。現地事業は現地側・日本側双方の良心の結晶だと言っても、少しも誇張ではない。中でも日本において現地代表として着実な支援態勢を敷いて現地活動を物心両面で支え続けたのは、「ペシャワール会」（問田直幹会長）という団体である。かつての私の派遣団体とのやり取りについては既にふれた通りである。ペシャワール会は特定の宗教や政治的立場にこだわらず、二五〇〇名の会員の層も様々で、九州を中心に日本全国に良心のネットワークを成している。主婦、学生、会社員、教師、公務員、農民、医療関係者、ジャーナリスト、労働組合員、会社役員など、現地と同様、実に多彩な構成である。寺の住職もいれば教会の牧師もいる。政治関係では「保守系」の者も「革新系」の者もいる。

ペシャワール会は一九八三年四月に準備会が作られ、正式に発足したのは一九八三年九月であ

った。十年を振り返れば、会も時の流れの中で、着実に何かを築きながら事業を拡大してきた。敗戦以来最大の世界秩序の変動という、希有の歴史的状況に遭遇し、しかも日本には馴染みの薄いパキスタン北西辺境州やアフガニスタンでの活動は、或る意味で我々に幸いした。ほとんど正確な情報もないまま、単身手探りで悪戦苦闘することによって、色眼鏡なく現地と直に接触できたからである。我々が「協力」に意気こんで始めたところが、むしろ様々な問題に直面して自分の足元を見る縁^{よすが}となってきたのである。よく難局を乗り切り、気づかないものに気づかされ、忘れていたものを思い出し、我々自身が豊かになったといえる。

会の発足当時、オイルショックの尾を引く日本にはどことなく閉塞したムードがあった。一方で高度経済成長の実がようやくよく自覚され始め、一九六〇・七〇年代に各地を風靡した社会運動——という言葉が適当かどうか分らないが、ともかく日本の急成長に伴う矛盾が明らかな形で噴出した時代の動きである——が、不承々に沈黙を余儀なくされていた時期でもあった。敗戦後の廢墟から「豊かさ」に向かって必死で走ってきた者が、一つの目標を達しかけ、安定の中にも不安が忍び込みつつあった時期だと思う。物の豊かさの突出の中で、「心の豊かさ」が盛んに述べられていた時代でもあった。中国の「文化大革命」は破産が明らかとなり、ベトナム戦争も終わって、沖縄も返還された。国運を賭けるような労使紛争は過去の思い出となり、公害問題も一時のような世を上げての危機感には既になかった。だが一方で、「しかし……」という思いが人々を捉らえていたのである。そして、まさにその時に、発展途上国が日本の通過してきた苦悩

を追っている事に思いを馳せる者は少なくなっていた。このような世情の中で、私のペシャワール赴任が明るい反応を呼んだのは事実であろう。しかし、単に「奇特なお医者さんの支援」というだけで、そんなに長続きするものではない。

当時「アジアを考える会」というのが福岡YMCAの一角にあった。青年海外協力隊OBや英語教師、海外登山をした者などが集まり、いわば時流に乗れぬ活動性の高い青年たちがエネルギーのはけ口を持て余していたようである。発足直後は私の知人・友人が主であったが、間もなくこれら「不満分子」が大挙して参加し、活発かつ楽しい会となった。いわば同好会的な要素があつて、七面倒な理論ぬきの行動性があつた。

実際、常に二十名前後の事務局員が、それぞれの自分の職業をもちながらも週に一度集まつて、募金・情宣活動、現地や会員との通信、会報発行、物品の輸送など、驚くほど膨大な事務量をこなしている。ペシャワール会なしに現地事業は成り立たない。その熱気に現地も支えられてきたと言える。大仰な「国際協力論」は飛びださずとも、その生き生きして楽しい様子は、会員自身がこれを一つの拠り所としている事がわかる。殺伐な世相でひとときのオアシスを提供しているのである。

時流に抗して

会が成長していった一九八〇年代の後半は、日本の国際化が叫ばれ始め、全国的規模で大小の

「国際交流団体」が雨後のタケノコのように生まれ、「国際〇〇」の催しものが盛んとなり、N G O（民間援助団体）という言葉が定着していった頃であった。まさかJ A Lや旅行代理店の陰謀でもなかるうが、これは海外旅行の増加と比例する。いずれにしても、情報操作の「付加価値」で食ってゆく連中の跳梁と時期を一つにする。実業よりも虚業が台頭し、「国際」は今や広告代理店依託事業として欠かせぬテーマに下落した。

しかし、「着実に」と述べたのは、ペシャワール会がこの国際化の波に乗って成長してきたのではなく、むしろこの時流に抗して、独自の活動を築き上げてきた点である。失礼かもしれないが、会員の多くは時流に乗るのが不器用で、「ボランティア」だの、「国際化」だのとは無縁な人達が多かった。かく言う私自身も愚鈍の見本のようで、「失われてゆく日本の風物」を惜しむナウくない人種に属する。もともとペシャワールに行くハメになったのが蝶や山で、遊びで行ってのつびきならぬ事態に次々と遭遇し、足が抜けなくなったまでのことである。「エーイ、こうなったら行けるところまで行け。対峙する問題から目を背けて今更現地を見捨てて逃げれるものか」と述べた方が事実に近い。会いにきた人々をがっかりさせることもあり、逆に安心させることもある。

「先生をそこまで駆り立てるものは何ですか。」

「やむにやまれぬ大和魂ですたい。」

「古くさいことを言って、はぐらかさないでくださいよ。」

「それで納得されなければ、縁とでも申しましょうか。」

「またまた、そんな。奥ゆかしい。」

こんな問答を数えきれないくらいしたが、実は半分「はぐらかし」ではなく、本当なのである。強いて言えば、現地に対する愛着と興味、そして多くの出会いが我々を動かすものなのかも知れない。ご縁だと言えば皆笑うが、軽く思ってもらうと困る。日本人は良い関わりを望むときに五円玉をのし袋に入れて渡す風習がある。「ご縁を」と、「ご縁」を付けて縁えんじそのものを崇拜する。

「縁がありましたら」を現地語に訳せば「インシャ・アッラー（神の御意志ならば）」に近い。天の摂理の赴くところ我ここにあり、である。我々が意図して何か成ることは案外少ない。昔の日本人はそれを知って大切にしていた筈だ。それを、味気ない因果関係に過度にこだわりの「偶然」だの、「いきあたりばったり」だのと言い換え、逆に「人の意志」とか「やる気」だとかを無闇やたらに強調するのは、日本人本来の美点と洞察力が薄れてきた証拠である。

それはさておき、ペシヤワール会と現地事業を支えてきたものは、「ご縁」とも言うべきで、自然な人と人との出会いと結び付きである。従って、我々は理念の問題で、まなじり 毗を決することもなければ、政治問題で口角泡を飛ばすこともない。理屈を言うよりいかに現実的に現地を助けるかで心を一つにしている訳である。日本で議論して「こっちの方が良いと決まりました」と、求められるパンの代わりに石を、魚の代わりに蛇を与えるような愚は犯さない。ペシヤワール会が「国際〇〇協議会」や「国際〇〇学会」に興味を示さないのは、そんな暇がないからで、まさに

縁が無いのである。

現地を中心に

一般に日本のNGOは、歴史の浅いせいもあってか、日本での対内宣伝が派手な割に肝腎の現地活動の中身が薄く、サロンの的な色彩が強いと言われている。甚だしきは、「諸外国に後れを取らず、日本のプレゼンスそのものに意義あり」などと述べる「国際問題評論家」が横行するくらいだから、民間レベルでは推して知るべしである。

もちろん、「国民運動」として国際理解の場を提供するのは決して悪いことではない。それはそれで、何かを知る縁になるかも知れない。地方自治体の間で流行する国際イベントも、長い目で見れば試行錯誤の始まりであると願いたい。しかし、このような風潮の中でペシャワール会が堅持したのは、あくまで現地を中心に活動を展開することであって、「国内活動は現地活動に従属する」とわざわざ述べるのはこのためである。文字通り、現地との二人三脚である。こうすれば、日本側の意見の相違や理念などというものは、現地の圧倒的なニーズの前には相対化される。即ち、現地の現実こそが日本側を実際に変えてゆく力となってきたのである。

ペシャワール会は、一般的な国際協力論など大言壮語はしない。身内の面倒を見るように、ひたすらペシャワール・アフガニスタンの事業に深く関わり続けるところに特色がある（私などは最近、「国際貢献論」などで意見を求められて一応尤もらしく聞こえることがあるらしく、感心

されたり、極論と思われたりする。だが実の所、知っているのは九州とペシャワール・アフガニスタンの一部だけであつて、我々の活動が「国際協力」だともにも考えたことはなかった）。会の名の示すとおりペシャワールという一地域に集中し、必要に応じて全ゆる角度から現地社会との付き合いを深めた。その範囲は乞食から要人に至るまで広範囲にわたる。合法活動の保証も、一見貧相な、日本の一地方の任意団体が北西辺境州政府やアフガニスタン暫定政権を直接交渉相手にしているなど、知る人ぞ知るである。

こうして伝えられにくい普通の人々の暮らしが現地に密着することで身近になつた。その中で我々が認識するようになったのは、「こちらが良いと思つていても相手にとつてはそうとは限らない」という平凡な真理である。当然、その逆もある。外国人の陥りやすい過ちは、理念にしろ事業にしろ、自国で説得力のあるものを作成して現地と関わりとうとするものである。初めはある程度避けられない事ではあるが、それは現地で本当に役立つよう修正されねばならない。そうでなければ、現地活動が外国人を満足させるために存在するという本末転倒になつてしまう。

三 無主義

会の理念を尋ねられることがあるが、冗談の通じる者に対しては、私は「無思想・無節操・無駄」の三無主義である、と答えて人をケムに巻く。

第一の「無思想」とは、特別な考えや立場、思想信条、理論に囚われないことであり、どだい

VI 「国際貢献論」台頭の中で



難民キャンプの子供らは明るかった

人間の思想などタカが知れているという我々の現地体験から生まれた諦観に基づいている。ペシヤワール会の発足した初めには、「〇〇主義」の論客も居ないではなかったが、そのうち自然に離れていった。自分だけ盛り上がる慈悲心や、万事を自分のものさしで裁断する論理は、我々の苦手とするところである。

例えば難民キャンプで、食うや食わずの子供の明るい笑顔を、「哀れな人を助けなければ」と頑張っている外国人ボランティアの暗い表情と比べて見ると、私はひそかに忍び笑いを催すのである。何も失うものがない人々の天真爛漫な楽天性というのは確かにある。

名誉財産はもちろん、いこじな主義主張を人が持ち始めると、それを守るためにどこか不自然な偽りが生まれ、ろくなことはないものである。良心や徳と呼ばれるものでさえ、「その人の輝きで

はなく、もつと大きなもの、人間が共通に属する神聖な輝きである」という或る神学者の主張は頷けるものがある。これを自分の業績や所有とするところに倒錯があり、気づかぬ傲りや偽りを生ずるというのが私のささやかな確信の一つである。

第二の「無節操」とは、誰からでも募金を取ることである。乞食から取ったこともある。これは説明を要する。赴任して程なく、私はことばの練習を兼ねてバザールをうろついていた時期があった。時に乞食にも遭遇する。一般にペシャワールの職業的乞食はわりあい堂々としており、「右や左の旦那さま」というような惨めたらしさはない。「コダーイ・デール・コシャリーギー（神は喜ばれます）」と述べ、「出せ」とばかりに手をさしだす者もある。

私も暇であったから、「人から施しを受けるに少し態度がデカイのではないか、『済みませんが、ただけないでしようか』くらいの腰の低さがあつた方が実入りが多いのではないか」と問い糺したところ、ある乞食が案外まじめに説明してくれた。

「あなたは神を信するムサルマン（イスラム教徒）ではありません。ザカート（施し）というのは貧乏人に余り金を投げやるものではありませんぞ。貧者に恵みを与えるのは、神に対して徳を積むことです。その心を忘れてはザカートもありませぬ。」

この乞食が高僧のような気がした。

「私も人に見捨てられたジュザーム（らい）の患者のために、はるか東方から来てかくかくしかじかの仕事をしておる。ならば、私もムサルマンで、これもザカートということになりはしな

いか。」

「そのとおり。」

「ならば、あなたも我々の仕事に施しをなされ。神は喜ばれますぞ。」

私がぬっと手を出すと、乞食は集めた小銭をちゅうちょなくくれた。私はまさかとは思ったが、つまらぬ議論に神を引き合いに出し、何か大切なものを冒瀆したような気がして畏れを覚えた。

同時に、純朴な人達だと思った。以後、我々もこれを採用し、「貧しい人に愛の手を」などという惨めたらしい募金はせず、「神は喜ばれます」とこそ言わないが、年金暮らしのお年寄りの千円も大きな団体の数百万円も等価のものとして、感謝していただくことにしている。現地の人は心までは貧しくないのである。

第三の「無駄」とは、後で「無駄なことをした」と失敗を率直に言えないところに成功も生まれないということである。いつも大本営発表のように、訳知り顔に日本側に成功のニュースを届けて喜ばせるのが目的となつては本末転倒で、嬉しいことも辛いことも、成功も失敗も、共に泣き笑いを分かち合おうというのである。そもそも、このような仕事自身が、経済性から見れば見返りのないムダである。

時に募金のために活動をアピールすることがあっても、我々は自分を売り渡す騒々しい自己宣伝とは無縁であつたと思う。この不器用な朴訥さは、事実さえ商品に仕立てるジャーナリストからもしばしば煙たがられた。だが、こうしてこそ、我々は現地活動の初志を見失う事なく活動を

継続できたのである。

日本人ボランティアの協力と挫折

八十一歳のボランティア

「アフガニスタン復興援助」で沸いた世界は、日本からも多くの訪問者やボランティアを送り出した。しかし、情勢は複雑怪奇なだけではなく、多大の危険をも孕んでいたのである。「復興援助」のあるところ、軍事力でしるぎを削る政治党派の手が入り、テロリズムが横行していた。援助側に悪意がなくとも、多くの救援団体はこの抗争に巻き込まれて動きがつかなくなった。

農業指導で有名な「風の学校」の中田正一氏が熱情を傾けてアフガニスタン入りを果たそうとしてJAMSを訪れたのもこの頃であった。氏は、内乱前のアフガニスタンに二年間滞在、これをふりだしに南西アジア各地の農業指導に半生を捧げた。ペシャワールを訪れた人々の中でも、最も忘れ得ぬ人の一人である。

私は最初、失礼なことをしてしまった。氏の来訪の発端は、JVC（日本ボランティア・センター）が、共同プロジェクトの可能性を探りにきてからである。その際に、氏の名前を初めて聞いたが、年齢八十一歳と知らされて、「そりゃ困る。もし脳卒中でも倒れられたら迷惑だ」と

述べた。それを伝えられた中田氏は怒ったらしい。「その医者に話をつけに行つてやる」と、JVCの若者を連れて、一九八九年七月、JAMSを訪ねてきた。

見れば恐縮の至り、八十一歳の高齢であるとは思えず、かくしゃくたる明治人の風貌、青年のように潑刺としており、「アフガニスタンで骨を埋める」とまで言い切った。私は氏の博識と行動力、何よりもアフガニスタンへの強い愛着とその言葉を信じ、以心伝心、協力を約した。氏の構想は、内乱で追われた難民の若者の多くが農業離れをしており、これを再教育して現地に合った農業技術の改良を伝授し、山村の故郷に送り返そうというものである。それに、乾燥地帯であるアフガニスタンで、氏の得意とする井戸掘りは魅力的だった。

しかし、急いでこのような人材を無駄に使つてはならぬ。しばらく情勢が鎮静するまで待機すべきだとの指示をJAMSに与え、「アフガニスタン国内の実地検分」で越境させて危険な状況にさらさせないようにした。結局、氏が熱望した実地検分は我々の手で強行させず、パキスタン側の国境地帯を案内させて満足させ、再会を信じて帰国させた。ペシャワール近郊に約二千坪の農地を五年契約で借りて氏の計画を全面的に支える準備をしたが、二年後に氏は脳腫瘍で逝去し、永の別れになってしまった。我々は痛恨の思いでその訃報に接した。

この中田氏の場合はむしろ特例で、多くの場合我々は「待て」としか言えなかった。ペシャワールやアフガニスタンは、日本人ボランティアが頭に描くようなヤワな世界ではない。自分に

良いからといって相手にとっても良い事だとは限らない。即席に何かを期待するのは大間違いである。私の脳裏にあったのは、日本の伝統社会を無視した、敗戦後のちぐはぐな占領政策と、「民主化」と称する伝統破壊の欧化政策である。それでも占領軍の方がまだましだった。少なくとも彼らはゆきずりではあり得なかったし、そのしでかしたツケも支払わねばならなかったからだ（太平洋戦争中の日本軍のお粗末な占領政策に至っては、おそらく似たような状態をもっとひどくしたものだだろう）。ペシャワールでは、援助する者の横柄な優越感とゆきずりの気楽さが同居していた。悪意や下心ではなく、そのことに対する自省の念が薄かったといえる。

尤も、これは即席には無理からぬことで、何げない言葉や行動で現地の人々が傷つくのを理解するのは時間がかかる。この中で外国人が明けっ広げに事を構えれば、必ず禍根を残す。アフガニスタンの各政治勢力が虎視眈々と各NGOへの影響力浸透を窺っていたし、国連の奨励していた「越境活動」は、パキスタン連邦政府としては勝手気ままな外国人の活動と警戒させていた。複雑な政争をぬって事を始めるには、ごく口の固い「現地の身内」だけで立案せざるを得なかったのである。

我々が具体的に国内診療所設置に動き出したのは一九八九年秋以降で、詳細な情報は一切流さず、密かに事を運んだのはこの為でもある。



食事をするJAMSスタッフ

団体交渉

とはいえ、ペシャワール会から赴いたボランティアは、現地事情を伝える意味でも重要な役割を果たした。それまで、私の拙い報告と散発的な訪問だけが現地と日本の支持者をつなぐ精神的な糸であった。「ともかく現場を見て欲しい」という時期から、実際に現地の仕事に参加することで交流と相互理解を深める段階に来ていた。JAMSの発足に伴って、ペシャワール会から直接現地の働きを共にするボランティア・ワーカーが多数送り出された。しかし、これも一つの壁につき当たり、我々は大きな教訓を得ることになった。

当時の一つの悩みの種は、日本人に対するJAMSスタッフの態度で、財政一切を日本に負う立場もあってか、過度に客人扱いすることであった。一九八九年四月、JAMS改編の区切りが一段落した頃、日本のペシャワール会を通して、意欲も

十分にある若い医師が二年の予定で助っ人に到着し、診療の質の改善に大きな役割を果たした。だが、予期せぬ事情で彼も悪戦苦闘の連続だった。

酷暑の到来時期に来たことも災いして疲労し、適応が速やかに進まなかった。これは、JAMSの首脳が彼を客人として奉った事もあり、言葉の壁もあって、意志疎通を欠いたのである。張り切ってやってきた彼には、ゼロから始めたばかりの診療員の多くがカルテの熱型表さえ満足に記載できず、基本的臨床訓練の途上にあることが苛立たしかった。

ある時、五歳の子供が赤痢で入院中死亡した。間際の緊急処置で指示が分からずうろろする診療員たちもどかしく思えたのだろう。吐き捨てるように言った。

「何だ、みんな素人の集まりじゃないか。」

これは刺すような悲しい言葉だった。日本のような基礎学力のない者たちが、数量単位や計算式から始めて、必死で学んできたのである。「素人」であればこそ、我々外国人が助っ人に来る価値があるのである。近視眼的に見てはならなかった。当座は阿呆のように見えても将来きつとモノになるという勘は、長く現地にいなければ分らない。それに時間の尺度が日本とは圧倒的に異なる。それを理解させ得なかったのは私の指導不足という以外にない。また、既に絶望的と見られる患者に、日本の儀式的な「緊急救命処置」をする習慣は現地で考えられないのである。

当然この医師としては既に訓練された一部のスタッフを知らずに可愛がり、長であるシャワリ医師と対等にあつた。指導部の権威を落とすことになった。一九九〇年八月に、この日本人医

師に可愛がられた三、四名のスタッフたちを中心に、ストライキまがいの団体交渉が発生した。この背景には大金を湯水のように使用して現地人材を雇用した諸外国NGOの活動があり、不釣り合いに要求水準を高めたのである。だが、当時わずか三十八名という小さなJAMSの所帯で、前代未聞のことである。幹部の一人である短気なムーサーなどは、激怒して首謀者の即時追放を主張した。シャワリ医師としては、このような形で同胞へのサービス、今まで築いてきた教育の成果を打ち壊されるのはたまらなかった。全員を集め、強い口調で対話した。

「我々は何のためにこのJAMSに集まって学んでいるのか。諸君は大変な思い違いをしている。我々は天から降ってくる金を使っているのではない。これは日本の良心的な人々が血のにじむ思いで捧げた募金である。待遇改善などとは諸君の能力程度で要求できるものではない。

アフガニスタンは諸君の国である。その復興こそが我々の目的ではないか。少しばかりの技術を覚えただけで天狗になるとは何事か。これは日本の友人たちに対して恥である。自分は諸君の要求に責任が持てぬ。君らが自分でJAMSの運営をするか、自分はここを去っても良い。指導部に従うか、どちらか。この場で決めてほしい。」

この時、私は前派遣団体との契約を解消し、その後の家族の生活立て直しのため一旦帰国しており、騒動の一因となった例の日本人医師もイギリスに留学して居なかった。後で人に聞いたところでは、シャワリ医師はうなだれて涙を流していたと云う。

「お客様扱い」への反省

この直後、九月中旬に私が戻ってきたとき、チームは自分の力で見事に再生していた。首脳部の機転で、速やかにアフガニスタン・ニングラハル州のマラリア流行地でフィールドワークを組織し、住民の診療に当たらせた。多くの熱病患者の生命が救われるのを見て、参加者全員が自分の仕事の生きがいと自信を感じた。こうして、JAMSは分解の危機を独力で乗り切っていたのである。

私自身、この出来事に対して深く反省するところがあり、以後日本人ボランティアへの警戒心を強めた。国内で世情に訴えるのは必ずしも悪い事どころか、現地補給を募金に仰ぐ会の性質上、不可欠でさえある。問題は、焦点が常に日本人に当てられ、肝腎の現地が十分視野に入らない事にあった。我々の留守に、肝腎の現地部隊は「活躍」の後始末に苦心惨憺、分解の憂き目をくい止めていた訳である。私がかつての派遣団体と決別したのも、まさに「現地を忘れて日本側の合意・都合を優先させる」点にあった。

「現地は日本人の活躍場所に非ず、共に歩む協力現場である」という言葉を空文化させてはならぬと思った（同様のことはパキスタン側のペシャワール・ミッション病院らい病棟でも繰り返されたが、当時一般に日本側の関心は派遣ワーカーの動向のみに注目し、現地の仕事にいかに影響があるかを考慮できないでいたと感じた）。

同年十二月、英国で熱帯医学を学び終え、ペシャワールに帰りつつあった同医師に注意を与え

た。もちろん、私自らの不注意に齒軋りしたのは言うまでもない。彼も思わぬ出来事に驚いた様子だった。何とか生まれたばかりのチームの質を高めようと意欲に燃えていたからである。また送り出す側も必死で準備し、最善の努力を尽くした。しかし、現地指導部のお客様扱い、私の指導・説明不足、日本側の無自覚などが複雑に絡まってこんな結末になってしまった。ボランティアを送り出すことの難しさを骨の髄まで思い知った。この事件は、日本―現地の共同歩調と役割分担を明確にして同様の不祥事で現地事業が分解せぬよう、日本人「ボランティア」に対してより一層厳しい態度で臨むよう、私をさらに硬化させた。

女性ワーカーへのニーズ

JAMSの出発点は元々パキスタン北西辺境州のらいコントロール計画に端を発したものである。従って、アフガニスタン側の「農村医療計画」と並んで、私の赴任当時から力を注いできたらい治療センターの改善も大切な仕事だった。ところが、北西辺境州・アフガニスタンで最大の問題は女性を隠す習慣で、これが女性患者発見・治療の妨げになっていた。六千名の登録患者のうち、女性の割合は二〇パーセントにも満たず、治療を受ける機会となれば更に少なかった。現地で女性ワーカーを得ることがこれまた困難で、こればかりは「外人部隊」に頼らざるを得ない。私もまた、JAMSでの仕事の比重が増すにつれて、らいセンター側が手薄になり、業務に円滑を欠き始めていた。

このような事情で、看護婦を主とする女性ワーカーが切実に求められていた。「現地のニーズ」という点で、実際彼女たちの働きは重要な役割を演じた。女性患者は安心して治療を受けることが出来るようになったし、長期在留ワーカーが州政府のフィールドワークに協力し始めてからは、それまで対立関係にあった州のらい診療員とミッション病院らい病棟との間が急速に緊密になっていった。これは私の赴任以来の宿願で、らいコントロール計画全体に良い協力をもたらしたという点で、いくら評価しても足りぬほど大切な意味を持ったのである。

試行錯誤

こうしてペシャワール・ミッション病院のらい病棟には、一九九〇年九月から看護婦一名、十月から女性医師一名が到着し、必死でウルドゥ語を学びながら適応に忙しかった。私もアフガニスタン側とバキスタン側との掛け持ちでは身が持たなかったから、大いに心強く思い、言葉の学習から技術指導まで力を尽くした。だが、ここでも問題がないでもなかった。ペシャワール会はずりせぬ新たな困難に、再び遭遇した。

現地の実情は女性には極めて不利であり、外出さえ気ままにできない状態である。おまけに、ウルドゥ語の他に、難解なパシュトゥ語まで意志疎通に必要とあつては、速やかに適応が進まなかったのが当然かも知れない。その上、家と職場の往復という密閉状態の中で、精神的に疲労が見えていた。



女性患者の治療をする日本人看護婦

かつて一九八五年、ペシヤワールの公営らいセ
ンター担当で一人のドイツ人女医が赴いたことが
あった。英語とウルドゥ語が流暢な上に、向こう
意気が荒く、きつぷのよいあねご肌、几帳面さを
除けばパシュトゥンに親和性があった。そのエー
デル医師さえ二年でサジを投げて帰ったくらいだ
から、苦勞はよく分かっていた。

日本人にはさらに不利な条件が重なる。英語が
欧米人ほど自由に操れない。送り出し態勢がしつ
かりしておらず、短期のサービスをボランティア
として行わざるを得ない。社交辞令が不得手で、
自分の意志や疑問を率直に伝える習慣がない。現
地で日本の延長としてふるまえる場所は外国人用
の高級ホテルくらいのものである。特に男女隔離
の風習は、いくら日本人に口を酸っぱくして述べ
ても短期で理解できる例はまれだったと言える。
日本人の特性は、そのチームワークと勤勉さ、

緻密さにある。だが特にペシヤワールのような所では、これが裏目に出る。地元の時間的ルーズさや、仕事の粗雑さは耐え難く、かといってそれを話せる意志疎通の手段を持たない。そこで、どうしても日本人で固まりやすく、周囲と隔壁を作ってしまう。一匹狼の集合のような現地社会では、明確な意思表示、敵を作らぬ社交性、地元の文化の尊重が不可欠である。また、たとい命を落としてもくよくよししないおらかさが要る。

ところが、幾名かの例外を除けば、「同じ日本人が居るから何とかなるだろう」という甘さが抜け切れず、一人で衝突を繰り返しながら現地との付き合い方を切り開いてゆく逞しさに乏しい。結局手取り足取りするほど私の負担は増し、まあまあ慣れてくる頃には半年や一年は優に過ぎており、もう帰国である。時には「不適応」で帰国を余儀なくされた例もあった。

もちろん、困難を乗り切って日本を出ることは生易しいことではない。だが現地側から見ると、日本でいかに苦勞して来たとしても、極論すれば、それはその人個人の問題で、どうでもいいことであり、要するに現地でいかに役立つかが評価されるのである。

一般的に言うところ、日本側では送り出すことに精一杯で、当然現地のことは余り見えてこなかった。油断すると「送り出す意義」がやたらに強調される余り、実際の現地の働きに停滞が起りかねない。

「働き」や「適応」といっても何でもなく、一つ一つの具体的な仕事のやり方、人との付き合い方の習得である。こちらの価値観や誇りをいったん停止して、白紙で相手に聞く態度である。

いかに「ヒューマニズム」に燃えた総論的なアイデアがあっても、それは具体的な場面で力がなければ無意味である。総論から各論は展開しない。各論から全てが始まる。しかし、これは現場での「実地指導」でも難しい。結局は本人が試行錯誤を重ねて身につけざるを得ないものである。

異文化

一九九一年以来定期滞在していたペシャワール会事務局のレントゲン技師・鍼灸士Hさんは、はじめの頃、憤慨して私に語ったものだ。

「先生、こちらの人間は約束を守らんとですか。私が午後の貴重な時間を割いて出張治療してきたのに、いくら待っても来んとです。おまけに病棟で財布は盗られる、ボケーっとして一日過ぎました。あたしゃ、嫌になりました。」

私は苦笑いしながら、「やっど異文化との接触が始まったか」と聞いている。ここでHさんが怒らなければ理解は生まれない。いや、これが普通の日本人の健全な反応で、怒ればこそ理解の余地がある。衝突によって、こちらの「常識」が崩される機会が生まれるのである。

「時間の感覚が違ふとです。明日と言われりゃ、一、二日は誤差があり、来週と言われりゃ二、三週くらいは目くじらを立てんとです。第一、山の中からペシャワールまで、バス賃に大金はたいて、何日もかけて出て来るとは、おすご事です。」

正直一途で実直なHさんは解ろうとするが、どうも気持ちが収まらない。「こんなことだから

遅れた国になってしまいうndらうか」と思ったりする。しばらくは、見るものの聞くものが嫌になつてくる。頼りにする「中村先生」も、どうも日本人ばなれして話を通じない。そう言えば、こちらの人間は何か与えても、「ありがとう」と余り言わない。何もそれを期待する訳ではないが、困った時はワアワア言つて来るくせに、治つたやら治らなかつたやら分らずに消えてゆく患者もある。傲慢かも知れぬが、人間の質が悪いのではなからうか……と彼は考えたはずである。

これが彼ほど率直でなければ、……私はここに使命を感じて来たが、いろんな人がいるんだ。ペシャワール会で聞いた「イブンカ」とはこういう事を言うのだろうか。私はもつと大きな心を持たなくてはならない。人を許す気持ちがないと、本当に駄目だ。もつと努力修養をせねば……と心のうちに思い、黙々と「ボランティア精神」で仕事に打ち込む。そして、そのうち疲れ果ててしまう筈である。或いは、その沈黙に周囲が心配して気を遣わせることになる。人間関係は次第に崩れてくる。

我々が尤もらしく「異文化、異文化」とくりかえすのは、具体的にはこういう日常の事例の積み重ねであつて、小さいと言えば小さい事である。しかし、数年もすれば、おいおい相手の事情も気持ちも分かつてきて、そのうち自分も適当に（いや適切に）ゆとりを持たせた時間感覚で対応しているだろう。ついでに自分の年齢も、誕生日から数えなければピンと来なくなっている筈である。

くよくよする事はない。見慣れぬものを初めから理解するのはむづかしい。その昔、唐の高

僧・玄奘が、仏典を求めてやはりペシヤワールや今の北西辺境州あたりを通り、「この地は人情が頗る悪い」「大唐西域記」と記している。高僧でさえこの調子であるから、そう偉くもない我々凡人が簡単に解るものではない。ただ、率直さは要る。うちにこもって「ねばならない」で自分を金縛りにするのを、仏教風に言えば「悪智」と称し、観念の格闘で終わる（玄奘は高僧だけに悪智は持たなかったらしい。率直に悪口を末代まで記している）。

閉鎖的思考

これでつまずいたボランテアも少なくない。もちろん、私の指導不足もある。だが、酷かも知れぬが、欧米人以上に我田引水、日本人に共通する閉鎖的思考を私は指摘せずにはおれない。それを今風に「非国際性」と言い換えれるかも知れない。七面倒なことを言わずとも、国際性とは、異なった習慣・異なったものの考え方をする集団との激突の中で身を処してゆく術である。確かに「良心」は、人が人であるかぎり、国境を越え、宗教・文化を越え、時代を越えてある。問題は、その表現や形式の相違であって、ここに人が相互の理解で工夫・努力せねばならない余地がある。我々が良心そのものと、その表し方とを混同するから、誤解が生ずる。

この事は単純であるが深刻かつ本質的である。人は良心によって殺人鬼にもなり、聖人にもなる。血気盛んな正義漢は、しばしば良心に発してコミュニニストとなり、人民の名で人民を殺戮した。東亜解放を掲げる大日本帝国の国民は、「大東亜共栄圏」建設の大義を実現しようと戦争に

突入した。「自由と民主主義」を掲げる米国は、朝鮮とベトナムを荒廃させ、世界に紛争をまきちらした。

良心の発露は、いかに格調高くとも、自分だけ盛り上がりつつ相手に心開いて聞かぬ所では、迷惑どころか有害でさえありうるのである。もちろん、「相互理解」と一口に言うが、簡単なものではない。いくら本を読んで納得しても得られるものもなく、具体的な関わりから総てが生ずる。喧嘩もなければ友情は生まれない。衝突もなければ融和は生まれない。そして、おおらかに聞き、おおらかに自分を表現せねば相手にも伝わらない。現地で日本人ボランティアに求められたのは、まさにこの点であった。

今また日本が「国際貢献」を掲げて海外活動をするとき、やたらに「動機の貴さ」のみが強調され、日本側だけの論理で事が動き始める。その結末は五十年前の太平洋戦争を想起すればよい。戦後教育で若い世代がたたきこまれたように、戦った将兵は決して「侵略」とは思っていないかった筈だ。前線の将兵とは日本国民そのものである。その多くは東亜解放の大義を胸に、今風に言えば、まさに「国際貢献」に邁進したのであって、徒に殺戮を目的に戦場を駆けめぐったのではない。だが「正義に燃える事」と「正義である事」とは異なる。結果は敗戦の語るところである。この縮小版を、我々は現実問題として、ペシヤワールで身を以て体験したと言えよう。異なった風土の理解には現地・日本の双方に痛みを強いしたが、こうして我々日本側もまた、率直な反省に立って、より良い協力の方法を身につけてゆくことになった。

複製・出力・二次利用禁止